

「個性の時代」の自由の女神

八〇年代というのは【個性の時代】の幕開きだった。男は男らしく、女は女らしく、子供らしく、年寄りらしく、会社員らしく、主婦らしく……そういった「らしさ」が社会を支える屋台骨になっている時代の終焉。だったともいえる。

八一年に発売されるや瞬く間に版を重ね、最終的には累計で八百万部を超えた戦後最大のベストセラー『窓ぎわのトットちゃん』。これは、そんな時代の転換期を象徴する一冊である。

本書のタイトルロールであるトットちゃんこと黒柳徹子は見事に個性的な人だ。それでいて紅白歌合戦の司会始めメインストリームな仕事をこなしてきた。「らしさ」の抑圧に揉まれることもあったろうが、彼女と同時代を生きてきた他の個性的な面々（同年代の作家なら戸川昌子や赤江瀑、泡坂妻夫らがいる）に比べても苦勞が少ないというか、変節を強いられなかった印象がある。

おそらく多くの方は黒柳の個性が「愛されるタイプの個性」であったから、そんなふうには世間を渡れたのだと考えているだろう。だが、そうではないことは本書を一読すればすぐに解る。彼女はただ、持って生まれた個性を歪め、撓（たわ）められなかっただけなのだ。

『窓ぎわのトットちゃん』は「らしさ」のために個性が纏足されていた時代、その難から逃れることのできた一人の少女の奇跡の物語、なのである。ナチから逃れて屋根裏に暮らした『アンネ・フランクの日記』の類書といったら不謹慎だと叱られちゃうだろうか。

トットちゃんは楽しい子供である。好奇心旺盛で冒険が大好き、頭の回転が頗る速く無邪気で天真爛漫。悪意というものがまるきりない。ケストナー描くキャラクターもかくや。もし、これがフィクションの児童書だったとしても、きっと大勢の人たちに愛されたことだろう。

しかし、ここで改めて思い出してほしい。描かれた少女の個性があまりにも強烈であるがゆえ、つい忘れてしまいがちだけれど、あくまで黒柳徹子＝トットちゃんは実在の人物だということを。

現実と空想は違う。基本的に学校が求める「らしさ」から程遠いエキセントリックな子供というのは他者と異なるというその一点において居場所を失う。嫌われるか、さもなくば無視される。ときに家庭にあってさえ、そういう子たちは共存できない「罪」を責められる。

そう。個性というのは原罪のようなものなのだ。

重い重い原罪を背負った主人公の活躍を追って、他人事でページを捲っているうちは本書は実に面白い。けれど、もし現実に彼女の担任教師の立場にいたら、机を並べなければならないクラスメートだとしたら、さぞや大変だろう。まして自分の子供だったら、どんなにか頭が痛いだろう。実際に本の冒頭で書かれているように黒柳は義務教育の一年めにして退学させられている。

おそらくは多少異端者に鷹揚になった現代社会でも彼女の個性は決して受容されるタイ

プのものではない。というか、むしろ黒柳の個性は二〇一〇年代の社会にあっては鑄造される前に発露することなく埋没してゆくのではないか。

たとえば本書に紹介される数々の奇行奇癖のなかでもとりわけ印象的なのが彼女が糞尿の山を築くエピソード。学校の汲み取り式トイレにお気に入りの財布を落としてしまったので、レスキューすべく地下の汚物槽を浚える顛末。黒柳の丁寧な筆致も相俟って、それは臨場感を伴い読者の腹を振る。

だがなにより素敵なのは、この逸話の結びである。素敵で、かつ考えさせられる。考えるべき問題と示唆に富む。

一ふつうなら、このトットちゃんの、してる事を見つけた時、「なんていうことをしてるんだ」とか「危ないから、やめなさい」と、たいがいの大人は、いうところだし、また、反対に、「手伝ってやろうか？」という人もいるに違いなかった。それなのに、／「終わったら、みんな、もどしておけよ」／とだけいった校長先生は、(なんて、素晴らしい)と、ママは、この話をトットちゃんから聞いて思った。(講談社文庫七一ページ)

黒柳は、この経験から様々なことを学んだろう。行動力。計画性の大切さ。一見不可能に見えることでもトライする価値があること。最終的に財布は見つからなかったが、それでも徒労は後悔に勝るのだという発見。汲み取り式で用を足してから、しゃがんだまま覗き込んではいけないという教訓(笑)。

わたしが単行本出版時に初読したときは、笑いながら、彼女の学んだことに爽やかな共感を覚えて、それだけだった。しかし、いま再読すると共感するのは抜き出した部分、退学になったトットちゃんを受け入れた「トモエ学園」校長、小林宗作氏の黒柳への対応である。

いや、そうじゃないな。共感というよりも本来ならば一般社会に順応している人々が条件反射的に嫌悪を催すであろう異端者と相対したとき、どう対処すべきか模範的な解答を提示されて感動した……といったほうがいいかもしれない。小林氏、すごい。戦前に、こういう考え方の人が存在して、実際に学校を運営できていたことを奇跡と呼ばずしてなんとしよう。と、わたしは嘆息する。

実は、小林氏の言葉を知って「素晴らしい」と感じられる黒柳の母、朝氏もすごいといえ、もっとすごい。大半の親は、もし自分の子供が同じことをしたら当たり前前に叱るだろう。むろん病気の原因になるからであり危険だからだ、が、それ以上に己の子供が異端であることを告知されるのは“自分自身にとっての不幸”だからだ。

そりゃあ、お前は糞尿まみれで幸福かもしれないが、そんな子を産んだワタシや不幸のずんどこだよ！ というのが異端者を村八分にし続けてきた日本人のメンタリティである。

わたしはなにも子供は一度は糞尿まみれになるべきだと主張しているのではない。とはいうもののトットちゃんのような経験則を持たないでいると、糞尿(的なもの)に対する免疫力も育たない。もしかしたら糞尿よりももっと汚いものを撒き散らすようになるかもしれ

れない。と憂慮はしている。

匿名をいいことに障害者やマイノリティを攻撃しているような輩を見ると、ああ、この人は子供の頃にウンコまみれにならなかったんだなあと思う。近い未来に汚物の海を泳ぐ羽目に陥って、ようやくその臭さに気づくだろうけれど。

ともあれ糞尿の山を築くような行為でしか得られない事柄を学習する機会は、どんどんどんどん子供たちから奪われてゆく。もちろんプロパティが清潔になるのはいいことなのだ。子供が侵入できるようなところに汚物槽の汲み出し口があるなんてリスクはないにこしたことはないのだ。が、キレイで安全な環境が整うことで失われる学びもある。

いま、『窓ぎわのトットちゃん』はベストセラーになった当時よりももっと明瞭に、そういう矛盾を教えてくれる。そしてまた、かつてより「らしさ」の呪縛に囚われていない異端者と鉢合わせする状況が増えている世の中であって、小林宗作氏の思考法やアイデアはいよいよ鮮烈で美しい輝きを帯びていることを。

プールに裸で入る習慣なんかも、糞尿同様、いやもしかしたら糞尿以上に現在では難しいことなのだろう。

一（どんな体も美しいのだ）／と校長先生は、生徒たちに教えたかった。トモエの生徒の中には、泰明ちゃんのように、小児麻痺の子や、背が、とても小さい、というような、ハンディキャップを持った子も、何人かいたから、裸になって、一緒に遊ぶ、ということが（中略）劣等意識を持たさないのに役立つのではないか（八八ページ）

このくだりを読んだとき、初読時には若干の違和感や居心地悪さがあったのだけれど、今回はちょっと泣いちゃった。それはわたしが年寄りになってセンチメンタリズムに弱くなっているせいもあるだろうが、たぶん「どんな体も美しいのだ」という言葉の意味が理解できるようになったからだろう。

誰もが帰属する世界の「らしさ」を身に着けた世の中というのは、おそらく整然として美しいのだろう。だが、その美しさは「どんな体も美しいのだ」の対極にある美しさである。

個性の時代の始まりは、小林氏の提言する美しさの時代をとりあえずは目指していた（はずだ）。『窓ぎわのトットちゃん』が歓迎された事実は、らしくないものの美しさを認めることに他ならないからだ。小学校の教科書に本書の一部が抜粋されて採用されたのは八〇年代が向かおうとした方向性を物語る。

ただ一方で、管理教育を標榜する愛知県では、教職員やPTAらが「タレント本を学校図書館に置くとはケンカラン」と同書を締め出したという。これはタレント本だからではなく、子供に個性は必要ない、子供は子供らしくあればそれでよいという時代の動きに逆らうアンシャン・レジーム的な反駁であろう。

ご存知のようにトットちゃんの賑やかな宣誓でオープンした【個性の時代】は順風満帆とは言い難い。相変わらず「らしさ」にしか依って立てない人もたくさんいる。けれどそんな

人たちが寄ってたかっても流れを押し留めるだけの障壁は立てられないでいる。アメリカでは黒人の大統領が誕生し、欧州各国では同性婚が成立してる時代なんだから。

読後の奇跡を目の当たりにしたような幸福感のなかで、もし、トットちゃんが現代日本にいたら、そしてトモエ学園に入学できなかつたら、どうなっていたら、そんなことをわたしは夢想した。

きっと、黒柳徹子は【おたく】になったのではあるまいか。

「らしさ」という才能を持たないエキセントリックな嗜好を有する連中が徒党を組んで、遊んだり助け合ったり、シンパシーを分かち合ったり傷を舐め合ったりする集団。それがわたしの【おたく】観である。『窓ぎわのトットちゃん』ブームと日本のおたく文化の黎明がほぼ時期を重ねているのは偶然ではなかろう。

一般には本書の二年後に書かれた中森明夫の『『おたく』の研究』を以てその嚆矢とする……というのが定説だが、異端を即ち悪と見做さない時代の予感『窓ぎわのトットちゃん』によってもたらされたとわたしは考察している。

トットちゃんというのは、ドラクロワの『民衆を導く自由の女神』の画面中央で三色旗を掲げるマリアンヌのごとき少女ではあるまいか。いや、マジで。